

健康

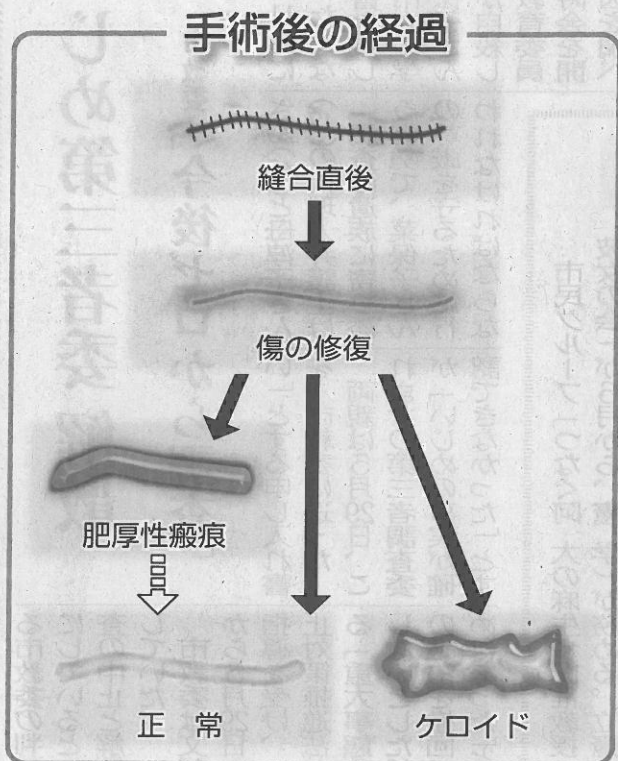
けがや手術などの傷痕が赤く盛り上がり、痛みやかゆみを伴うケロイド。どう対処すればいいのか分からず、長年にわたり症状に悩む患者は多い。だが、外科手術や放射線治療などを組み合わせた複合治療で、ケロイドは治せるようになってきた。徳島大学院形成外科学分野の峯田一秀助教に、傷痕が目立ちにくい治療法を聞いた。(山口和也)

とくしま医療最前線



峯田 一秀
徳島大学院
形成外科学分野助教

傷痕は通常、人体に備わった自然治癒力で時間の経過とともに目立たなくなる。ところが、傷を修復する役割を果たす「線維芽細胞」が異常に活発化する



ケロイド

と、ミニズ腫れのように赤く盛り上がった状態になる。これがケロイドと呼ばれる症状だ。ケロイドに似た疾患に「肥厚性瘢痕」があり、これは時間がたてば治まるのに対し、ケロイドは自然に治ることがなく、周囲の正常な皮膚にまで広がっていく厄介な疾患だ。ケロイドは、傷痕に張力がかかると発症しやすい。胸や腹、肩回りに多くできるのは、呼吸や運動などで皮膚が引っ張られやすいためだ。

縫合工夫 傷痕目立たず

発症には、遺伝が関係するとされる。なりやすい体質の人は、にきびなどの軽い皮膚炎症やピアスを開けた耳にも現れる。

従来、ケロイド治療の外科手術は、再発しやすく、悪化する恐れもあるとして、否定的な見方が少なくなかった。しかし、縫合の仕方や放射線治療との併用で、再発する可能性を最小限に抑えられるようになって

いる。近年採用されている新たな縫合法は、ケロイドを切除した後、皮膚よりも深い筋膜から傷口を縫い合わせ、表面が引っ張られないようにゆとりを持たせる。Zの字のようにジグザグに切開し、傷口にかかる張力を分散させる縫い方もあるという。

放射線治療には、線維芽細胞の働きを抑える効果がある。手術から数日間、複

複合治療で再発防ぐ

数回に分けて縫合部を電子線照射する。

再発を防ぐには、手術後のケアも大切だ。飲み薬や貼り薬の効果的な使用に加え、傷痕に力がかからないようテープで固定する処置など、さまざまな治療法を組み合わせる。

徳島大学病院は今年4月、県内で初めてケロイド専門外来を開設した。ケロイド治療の患者は増加傾向にあり、専門外来では年間100〜150人の患者を見込んでいる。

治療法は、体質や年齢、ケロイドのできた部位によって異なる。峯田助教は「他の診療科と連携しながら、一人一人に最適な治療を提供したい」と話している。

ケロイド専門外来の問い合わせは同病院形成外科・美容外科(電088(633)7047)。

原因解明し新薬を

ケロイド治療をめぐるのは、外科手術のほか、ステロイドの貼り薬や注射、抗アレルギー薬などがある。しかし、発症の詳細い原因は解明されていない。峯田一秀助教らの研究グループは、徳島大学院社会産業理工学研究部の佐藤克也講師らと連携し、発症メカニズムの解明に向けた研究を進めている。

研究グループは、ケロイド発症時に線維芽細胞が異常に活性化している現象に着目した。佐藤講師らが開発した実験装置を使い、傷痕に繰り返し張力がかか

る状態を再現。実験により、細胞レベルで起きている変化を解析できれば、発症の仕組みが明らかになる可能性がある。ケロイド治療に多く用いられるステロイド注射は、数回の使用で症状緩和が見込める半面、長く続けると患部の皮膚が薄くなり、皮下脂肪が萎縮したりする副作用がある。女性は生理不順を招く場合もある。

研究グループは、ステロイド以外の新薬を開発し、より安全で効果的なケロイド治療につなげたいと考えた。